

成人の日

1月9日は、「成人の日」です。

総務省の発表によると、2012年1月1日現在で20歳の新成人は122万人で、5年連続して過去最少記録を更新しました。新成人のピークは第1次ベビーブーム世代が成人を迎えた1970年の246万人ですから、遂にピークの半数割れという状況になっており、いやが上にも日本の少子化を実感せざるを得ません。

さて、「成人の日」には成人式の会場に向かうのであろう若い男女の着飾った姿を見ますが、そんな華やいだ風景は、成人式とは関係のない私まで、何となく明るい気持ちにさせてくれます。

この「成人の日」は、もともとは終戦後間もない1946年11月、埼玉県内の蕨町（現蕨市）において、次代を担う青年達を励まそうと青年団が主催して実施された「青年祭」がモデルとなったといわれています。これに影響を受けた政府は、1948年に施行された国民の祝日に関する法律の中で、「おとなになったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます」ため、1月15日を「成人の日」と定めることとなりました。

1月15日を何故「成人の日」にしたかということ、昔、子どもが一人前になったことを祝い元服（げんぷく）の儀が行われていましたが、この儀式は、小正月である15日に行われていたことから、この日を「成人の日」としたとされています。なお、2000年からは、ハッピーマンデー制度の導入に伴い、それまでの1月15日から1月の第2月曜日に変更になり今日に至っています。

「成人の日」には、多くの市町村では成人式が開催され、新成人を祝う式典が開催されていますが、今から10年ほど前から、全国各地で式典を台無しにするような新成人の行動が問題になってきました。最近はかなり落ち着いてきた感じがしますが、それでも、毎年、テレビを通して、酒によってはしゃぎ回ったり、傍若無人の振る舞いをする新成人の姿を見ることは、大変残念です。

「成人の日」は、大人になったことを自覚し、自ら生き抜こうとする青年達

を祝い励ますことを趣旨とするものであり、単に20歳になったことを祝うために設けられたものではありません。また、成人式は、自分が一人前の大人になったことを自覚し、回りの大人たち、社会もそのことを認めるという儀式であり、それが如何に形式的なものであったとしても、人として成長していく過程において大切にしていかなければならない通過儀礼の一つです。

最近の成人式は、新成人の参加を促すと共に、式を混乱させず盛り上げようと、形式的なことを出来るだけ避け楽しい演出を考えたり、ディズニーランドといったテーマパークなどを会場にするというところもあり、成人式はお誕生会とは違うはずだと考える者にとっては、いささか嘆かわしい風景です。しかし考えてみれば、そう嘆く前に、たとえ儀礼的なものであっても、高々1、2時間の式典にも耐えられないような子どもを育ててしまった現実が一方にあることを、忘れてはならないでしょう。

「成人の日」を前にして、これまで子ども達に対し、一つ一つの通過儀礼を大切にきてきたかどうか、一人前の人間として生きていく上での心構えや態度、社会に参加していくために守るべき社会規範などについて、十分な指導をしてきたかどうか、と私は自らの反省を込めて皆さんに問いかけたいと思います。

(塾頭 吉田 洋一)